

第Ⅱ部「第3章 大衆文化と民衆の生活」

大谷猛夫

1 各部の構成と執筆者

第1節 富美子たちの家族はなぜ朝鮮に渡ったか	(韓・洪宗郁)
第2節 東アジアの都市民衆はどのように暮らしていたのか	(中・高瑩瑩)
第3節 植民地と戦場で大衆はどんな歌を歌ったか	(韓・金正仁)
第4節 すべてを戦争に一子どもたちは総力戦の時代をどう生きたか	(日・斎藤一晴)
コラム 中国の赤い星	(日・宮川 英一)
コラム 子どもの日	(中・徐志民)
コラム 留学した新女性、女性教育に飛び込む	(韓・金正仁)

2 各節の概要と私の意見

(1) 第1節 富美子たちの家族はなぜ朝鮮に渡ったか

最初の問い「海の向こう側にはよりよい生活が待っていたのか」

この節では「なぜ」を問うています。東アジアの人たちの国境を越えた移動の理由を考えることになっています。①日本→朝鮮、これは植民地支配のため、日本人が入植してかなり「豊かな」生活を維持します。②朝鮮→日本、これは植民地支配を逃れて日本での働き場所を求めて移動します。③朝鮮→中国、②と同様の理由で中国東北部に働き場所を求めての移動です。④中国→朝鮮、日本の植民地支配で産業が発達していたため、労働者の移住が増えます。⑤中国→日本、産業がすすんでいた日本への労働者、また留学生も増えていきます。

⑥日本→中国、日露戦争後、満州を支配して「移民」を奨励しました。

それぞれ国境を越えた民衆は、故郷より「ましな」生活となった局面もありますが、戦争終結後にはそれぞれ地獄の日々があったようです。朝鮮⇄中国の場合は、戦後も変わらず「移住先」で安定した生活があったようです。朝鮮・中国の民衆は日本帝国主義という共通の「敵」に対する共同もありました。

2番目の問い「青年たちは留学を通して何を学んだか」では、朝鮮・中国の若者が日本に留学して多くの知識を学びました。郭沫若と尹東柱をとりあげています。郭沫若はその後中国で活躍しますが、尹東柱は獄中で死亡しますが、今の韓国で国民的詩人として尊敬されています。これらの人々が朝鮮・中国で協力して、抗日を戦っています。また、日本と朝鮮の社会主義者が中国で活動したことにもふれています。

3番目の問い「戦争による過酷な強制連行は何を残したか」では、日本が戦争に入り、朝鮮人・中国人を強制連行したようすが描かれています。しかし、著者が韓国人という制

約の下でしょうか、中国人の強制連行については、やや不正確です。日本への中国人強制連行については「閣議決定」がありますが、これについて触れていません。さらに日本が占領していた中国東北部（満州国）への中国人の強制連行は1千万人以上と言われていますが、実体すらわかっていません。満州地域に進出した日本企業は日本軍と共同して、華北・華中から強制連行し、奴隷労働をさせ、死亡すると現場近くに放置し「死体の山」を築きました。「万人坑」とよばれています。このことにも触れていません。

（2） 東アジアの都市民衆はどのように暮らしていたのか

どのように～～、という問いかけは難しい。どう答えてよいかわからないからです。説明を聞いて「フーン」と思うだけです。

第一の問いは「3つの地域はどのように都市化したか」ですが、青島・群山・那覇という選択がこの時期の都市化を示すにふさわしい選択であるかどうかです。

青島はドイツの占領で、都市化がすすむ（というよりヨーロッパ化がすすむ）という状況かもしれませんが、群山・那覇がこの時期に都市化がすすんだと評価して良いのでしょうか。ここが少し疑問です。群山より仁川、木浦などのほうが選択としてはよかったですのではないのでしょうか。那覇は琉球王国の流れから言って、日本のこの時期の都市化を象徴するような都市ではないような気がします。難しいところですが、広島などはどうでしょうか。

第二の問いは「都市と民衆はどのような関係を築いてきたのか」では、都市化によって、現地住民のくらしが破壊されたようすを描いています。進出してきた「外来者」が豊かな暮らしを送るための行為がその原因です。これはよく描かれていると思います。ちなみに1920年代の沖縄からの移民は「世界恐慌」の圧力ではありません（P164）。

第三の問いは「戦争で都市住民のくらしはどうか変化したか」では、青島だけが第一次大戦の影響から説き起こしています。群山・那覇は第二次世界大戦の関連から記述されています。同等の記述になっていません。青島・群山はそこが戦場になっていませんが、那覇は「戦場」になっていて、空襲で90%が破壊された、と記述されています。

（3） 植民地と戦場で大衆はどんな歌を歌ったのか

第1の問い「いつから大衆文化を楽しむようになったのか」で、西洋化の流れの中で、レコードとラジオを取り上げています。これに先立ち映画の文化も入ってきます。流れからすれば映画の記述を先にしたほうがわかりやすかったかもしれません。

次の問い「植民地統治と戦争は映画にどのように影響を与えたか」ですが、この問い自体が適切とはいえないような気がします。製作者がその国の国策によって、どう変わるかによるためです。日本で「戦争賛美」の映画がつくられ、中国で「抗日戦争」の映画がつくられていくのは当然のことです。朝鮮で「アリラン」が大ヒットするのは、植民政策とはかかわりが無いと思います。また、中国では「抗日戦争」の映画はつくられますが、戦

争そのものに反対する「反戦」の映画はないと思います。

第3の問い「民衆はどんな歌を歌ったのか」では、「アリラン」「東京行進曲」「義勇軍行進曲」がまずとりあげられています。この3つも少し時期がちがっています。アリランは20年代、東京行進曲は30年代初め、義勇軍行進曲はさらにそのあと30年代後半です。歌わされていた、という側面はないでしょうか。大衆の気分を反映している、というのはその通りです。

この節の最後に「現在の大衆文化は、どのような役割を果たしているのでしょうか。一緒に考えてみましょう。」とありますが、この節の脈絡から考えるのは無理だと思います。

(4) すべてを戦争に一子どもたちは総力戦の時代をどう生きたのか

この節の記述がこの章のなかでもっとも読みやすいです。斎藤一晴さんに敬意を表します。

第一の問い「子どもたちはどのように戦争とつながっていたのか」では、紙芝居を通じて、国策にのせられていくようすが目に浮かびます。この紙芝居が日本初で朝鮮・中国でも活用されていた事実がよく読み取れます。

第二の問い「戦争や植民地支配において、子どもたちはどのような経験をしたのか」では、生まれた場所によって、多様な経験の違いがあることが記述されています。中国の難民となった子どもの体験、朝鮮では、ラジオ体操で同じ体験を強要されています。日本の子どもたちは兵士になることを夢みるようにされていきます。

第3の問い「総力戦体制のなかで、障がいや障がい（児）はどのように位置づけられたか」では、障がい者を「戦病者」とそれ以外を区別し、障がい者も「戦争に役立ったか」どうかで差別されていた事実がえがかれています。当然ですが、このような問いかけでは、中国の記述はできません。どういう「問い」にしたらよいのでしょうか。

<コラム>中国の赤い星

エドガー・スノーの著書である「中国の赤い星」は、1937年の著作ですが、中国語版は1938年に出されています。これが中国の国内でどう読まれていたのかにふれるとよかったです。日韓では、戦後の出版ですが、それぞれの国の社会運動にもそれなりの影響を広がっていきます。私も読んだ記憶があります。

コラム<子どもの日>

子どもの日の制定が各国の実情により、決められた過程がふれられていて面白く読みました。日本の5月5日、中国の4月4日、朝鮮は5月1日、とそれぞれの慣習のいきさつと、国家の関与にも触れられています。国際子どもの日が6月1日であることも知りませんでした。

<コラム>留学した新女性、女性教育に飛び込む

津田梅子、車美理士、呉胎芳の 3 人を取りあげています。共通することは「アメリカ留学」です。そして帰国後に自国の女性の地位向上のために奮闘する姿を描いています。この時期の女性の地位を上げるための努力がよく描かれていると思います。

最後に、中国人の人名表記のルビについてです。郭沫若 (p156) かくまつじゃく、呉胎芳 (p180) ごいほう、なのに、聶耳 (p171) だけが、ニェアル、とカタカナ表記になっています。中国の人名は日本語表記の時、日本語読みしてよい、というのが約束になっている、と思います。日本人の人名も中国では、漢字の中国語読みでよい、というふうになっているはずです。そうであるならば、聶耳は「じょうじ」とすべきではないでしょうか。